

## 編 集 後 記

新潟大学は今まで一例の気づきから、その分子病態を解明し、世界に発信してきました。CARASILもEAOHも最初は、1人の医師の、この症例は異なるという、臭覚が重要でした。このような症例は、そんなに何回も経験するわけではありません。その一例を経験した時、それが他とは異なると捉える臨床医としての目をもつ為には、症例を、よくかみしめる訓練が必要です。それには症例報告が何よりも力がつきます。臨床神経学の初代編集長は、当科の初代教授の椿忠雄先生です。椿先生の、当時の本誌に対するお言葉を拝見しますと、症例報告にこだわった雑誌をつくるという思いが伝わってきます。一例に学び、それを共有していくという姿勢、これが本誌の使命と考えています。症例報告が出来るということは、その症例について、向き合って、深く考えたという証です。その記録を残す行為は、医療の公共性を顧みると、極めて重要な行為だと思えます。私の最初の論文は臨床神経学です。今でもその症例で教わった事はよく覚えています。記憶だけでは無く、記録に残す重要性を、一人一人が顧み、症例報告を発表できる本誌を、是非、有効に活用してもらいたいと思います。症例に立脚した考察の重要性は、今も薄れることはありません。

また、母国語で記載される雑誌を、学会が持つことは、大変重要です。最近みた“メッセージ”という映画は“「どのような言語によってでも現実世界は正しく把握できるものだ」とする立場に疑問を呈し、「言語はその話者の世界観の形成に差異的に関与する」という、言語と思考に関するサピエ=ウォーフの仮説を映像化していました。英語と日本語では、その症例の病（やまい）の世界観が自ずと違って来るでしょう。日本語でしか表現できない、伝わっていかない日本人の病の世界観もあると思います。日本語での症例報告雑誌である本誌の重要性は、そのような所にもあると考えています。その他にも、本誌は、言葉遣いから指導し、アクセプトまで丁寧に同伴してくれる優しい雑誌です。またカラーが無料で、図も沢山載せられます。あなたの気づきを、思う存分、その質感まで詳細に残すことが出来ます。是非、皆さんの、その気づきを、記録として本誌に残し、今の、そして未来の皆さんと共有して頂けることを願っています。これから4年間、少しでもそのお手伝いが出来ればと考えています。多くの投稿をお待ちしています。

(小野寺 理)

## 〈 編 集 委 員 〉

編集委員長 園生 雅弘 編集副委員長 高尾 昌樹  
 編集委員 荒木 信夫 飯塚 高浩 池田 昭夫 小野寺 理 亀井 聡  
 鈴木 匡子 坪井 義夫 新野 正明 西野 一三 星野 晴彦 三澤 園子

「臨床神経学」 第57巻 第8号 平成29年8月1日発行  
 編集者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 一般社団法人日本神経学会  
 発行者 東京都文京区湯島二丁目31番21号 一丸ビル 高橋 良輔  
 印刷所 〔郵便番号 602-8048〕京都市上京区下立売通小川東入 中西印刷株式会社

発行所 〔郵便番号 113-0034〕東京都文京区湯島二丁目 31 番 21 号 一丸ビル  
 日本神経学会

郵便振替口座 東京 00120-0-12550

TEL. 03-3815-1080 FAX. 03-3815-1931

ホームページアドレス：<http://www.neurology-jp.org/>